

朝鮮通信使再現行事

－呉市の事例－

小川 英史（公益財団法人蘭島文化振興財団）

1. 事業主体団体の紹介

広島県呉市下蒲刈町では毎年10月の第3日曜日に朝鮮通信使再現行列を開催している（図1）。呉市より指定管理を受けている公益財団法人蘭島文化振興財団が主催、共催で朝鮮通信使行列保存会、呉市が名前を連ねている。朝鮮通信使行列保存会は第1回目の朝鮮通信使再現行列を開催するにあたり再現行列が毎年の恒例行事として円滑に実行するために設置された会である。保存会の規約には「保存会は下蒲刈町の歴史の掘り起し及び地域振興の発展に寄与することを目的とする。」と定められた。朝鮮通信使行列保存会は現在でもほとんどが地元島民で構成されている。下蒲刈町の朝鮮通信使再現行列は地域文化の掘り起しと地域振興の発展を目的として平成15年（2003）に第1回を迎えた。

2. 関連する史跡等の概要

広島県呉市下蒲刈町には朝鮮通信使が宿泊した



図1 下蒲刈の通信使再現行列

「上の茶屋」へ通じていた階段が「三ノ瀬朝鮮通信使宿館跡」（指定：昭和15年（1940）2月23日）として広島県指定史跡とされている。また、朝鮮通信使に関連のある史跡として、朝鮮通信使来聘の際に総責任者であった、対馬藩主の宿所として使用された三ノ瀬御本陣の場所に、「三ノ瀬御本陣跡（石柱）」（指定：昭和15年（1940）2月23日）がある。この「三ノ瀬御本陣跡」の目前には、江戸時代初期に広島藩主であった福島正則が整備した長雁木が今も遺っている。ここに朝鮮通信使が来る度に新造の桟橋が設けられ、朝鮮通信使船が着くとこの桟橋より使節は宿舎まで進んだ。現在の長雁木は約半分55mの長さしか残っていないが今も往時の姿を偲ぶことが出来る。

3. 報告事例の始まった背景や経緯

下蒲刈島で朝鮮通信使再現行列が始まった平成15年（2003）までに既に全国の朝鮮通信使にゆかりのある各地では、朝鮮通信使再現行列が始まっていた。下蒲刈町は古くから瀬戸内海交通の要衝として栄え、朝鮮通信使の接待場所に指定された歴史があり、幕府の外交記録を江戸後期にまとめた「通行一覧」の中には広島藩のここ下蒲刈での接待が一番優れていたことを示す、「安芸蒲刈御馳走一番」という言葉が記録されている。朝鮮通信使の饗応場所として選ばれ、藩をあげて歓待をした歴史があり、それを記念して伝えるために朝鮮通信使資料館の「御馳走一番館」が整備された。この資料館では、朝鮮通信使船の復元模型や饗応膳である七五三膳の復元模型

などを展示し、1年を通して朝鮮通信使を学習できる施設としている。現在では呉市内の小学6年生がふるさと探訪事業で毎年来館し、地域の歴史を学ぶ場として活用されている。このように地域の文化や歴史を大切にする姿勢の中から朝鮮通信使再現行列は始まった。

4. 史実、再現方法、現代的アレンジ部分、史実の伝え方

朝鮮通信使は陸路である京都から江戸までを大行列を組み行進しその姿は多くの絵巻物や記録物に残されているが、海路である下蒲刈では行列を編成していない。朝鮮通信使が残した第10次の使行録『奉使日本時聞見録』¹⁾にも「館所の門から三・四間ばかりしか離れていないので其の併歩いて入って行った」とある。それ故、下蒲刈島で「朝鮮通信使再現行列」を行うということは現代的アレンジである。一方、海路では数百艘の船が朝鮮通信使船を警固し、担当海域の通航の安全に万全を期していたが、船団での航行が描かれた絵図は多くない上に、現代において数百艘もの大船団を再現することは困難である。

異国の音楽を演奏しながら進む朝鮮通信使行列は江戸時代の人々を魅了した華やかなものである。現代の人々にも朝鮮通信使から行列を連想する人が多いのではないだろうか。そこで、下蒲刈島の大歴史である朝鮮通信使歓待の歴史を町おこしの柱として島内外に広くアピールするために、下蒲刈島で



図2 絵図を参考に再現された輿

も朝鮮通信使行列を再現することが決まった。

下蒲刈では行列は組まれた歴史がないとはいえ、再現するなら中途半端な行列は出来ない。再現するに当たり、出来るかぎり史実に基づいた行列の再現にこだわった。シナリオの作成に関しては朝鮮通信使地域史研究家で、元蘭島文化振興財団副理事長である柴村敬次郎氏の助言を頂きながら、文献を参考に作成した。朝鮮通信使の行列では、身分の高い正使、副使、従事官は輿に乗り陸路を進んだため、下蒲刈町では絵図を参考に輿の形状を忠実に再現した。そのため輿の重さは約250kgあり人が乗ると約300kg程になる。この輿を担いで1.2kmを練り歩くのである（図2）。日本や韓国で朝鮮通信使再現行列が行われているが、輿を実際に担いで進むのは下蒲刈だけである。

輿以外にも行列の隊列、衣装、通信使の持ち物も絵図や記録を基に再現した。通信使行列では行進しながら楽人が音楽を奏でていた²⁾。江戸時代に聞くことができない異国情緒あふれる音楽も当時の民衆の心を惹きつけたであろう。その音楽の再現には、毎年韓国から京畿国際通商高校を招待し、行列に参加してもらい、韓国伝統音楽を奏でてもらっている。

現代的アレンジとして、海路であった下蒲刈ならではの演出もある。「櫂伝馬船入港」イベントである（図3）。史実としては長雁木に新造された桟橋に朝鮮通信使船がついたので、伝馬船が長雁木に入港することは無かったと思われるが、現代に再現するにあたり、櫂伝馬船に乗った広島藩主が登場し、



図3 櫂伝馬船入港イベント

朝鮮通信使正使役と三之瀬御本陣跡前で友好の挨拶を交わすイベントを行っている。櫂伝馬船は地元の青年会が中心となり、船を漕ぎ登場する。長雁木前で勢いよくUターンする姿は毎年多くの観客から好評をいただいている。

他にアレンジとして、通信使行列には無い演出であるが、再現行列では在日本大韓民國民團廣島県地方本部の皆さんに行列の先頭でサムルノリを演奏しながら行進してもらい、また民団の女性にはチマチョゴリを着て行列に華を添えていただいている。初回より、駐廣島韓國總領事館、在日本大韓民國民團廣島県地方本部に協力していただいている。

史実の伝え方として、行列の通る1.2kmの間には、朝鮮通信使資料館があり、行列を見終わった観客や行列の参加者が朝鮮通信使について改めて学ぶ場としても利用されている。また、行列と一緒に各所でナレーションが入り、行列参加者や見物客へ朝鮮通信使と下蒲刈地域の歴史を伝えるようにしている。

5. 運営体制

基本的に大部分は主催団体である公益財団法人蘭島文化振興財団の職員が多く役割を分担し行っている。また共催である「朝鮮通信使行列保存会」にも行列の警備や衣装の着付けなどをお願いしている。大韓民国より毎年京畿國際通商高校を招聘し、呉市國際交流協会にも通訳などの協力をいただいている。行列の出発地点の下蒲刈市民センターとゴール地点の会場設営と音響設備に関しては、現在は業者発注となっている。

6. 儀式・行事の再現における課題、今後の展望

(1) 朝鮮通信使再現行列を行って良かった点

先にも述べた通り、「朝鮮通信使再現行列」は地域の文化と歴史の掘り起しと、地域振興を目的に始まり、現在では下蒲刈島外から6,000人の見物客が訪れる島一番の行事となっている。毎年の恒例行事として続け、今ではすっかり地域の恒例行事として

地域住民の間で認識されるようになっている。このため朝鮮通信使再現行列を行って良かった点は、地域住民に「朝鮮通信使」が鮮やかにその心に生きている点である。朝鮮通信使関係の史跡の整備だけでなく、朝鮮通信使資料館を整備したことにより、朝鮮通信使が過去の歴史事項ではなく、現在進行形で地域住民と寄り添っていると感じる。

また、「安芸蒲刈御馳走一番」という記録により「おもてなし」の町、地域としてブランドを確立し、観光や文化振興に「おもてなしの島・町」として寄与している点もある。

遺跡整備だけではおそらく地域住民の中で朝鮮通信使の歴史は風化して忘れ去られていたかもしれない。しかし、毎年の恒例行事として朝鮮通信使再現行列を地域住民の協力のもと継続することにより、行列参加者だけでなく、地域の歴史の中に深く朝鮮通信使が生き続けることと思う。

(2) 今後同様の計画者へのアドバイス

下蒲刈の朝鮮通信使再現行列の経験から言えることは、大変かもしれないが、地域住民が総出で参加することが大切ということであると思う。イベント会社などと連携を取ればもう少し「楽」が出来るかもしれない。しかし、イベント会社へ委託する比率が増えるにつれて、その地域の独自性が失われ、地域住民の心も離れ、ただの観光客を誘致するイベントになり下がりえない。「Living History」という言葉を考えると、地域性、独自性、住民の自主性は決して失ってはいけない要素のように思われる。

【参考文献】

- 1) 曹蘭谷・著 若松實・訳 1993『奉使 日本時間見録』日朝協会愛知県連合会 p.76
- 2) 日韓共通歴史教材制作チーム編 2005『日韓共通歴史教材朝鮮通信使豊臣秀吉の朝鮮侵略から友好へ』明石書店 pp.67-68